

公式訪問先記録

2024年1月22日

9時30分～10時00分 ラオス教育・スポーツ省

報告者：佐橋 翔太、森本 貴幸



ラオスの教育スポーツ省にて、局長である Khamapaseuth氏と、我々CSAの活動や支援状況、今のラオスにおける教育の実態など意見交換をしました。

30分と非常に短い時間ではありましたが、CSAの活動の意義と、それがどのような効果をもたらしているか、知ることができる非常に有意義な訪問となりました。

我々のこれからの訪問日程を共有した後、局長からは、学校や寮の視察をした際に、生活の実態を見て不足しているものがあれば支援をお願いしたいとのことでした。ラオスも国として当然支援はしているが、ラオス政

府の支援が届かないところ、見えていないところを日本やCSAに支援いただきたい旨を我々に伝えてくださいました。

特に寮の状況に関しては地域によって環境が全く異なる部分もあるとのことでした。今回の訪問日程では1か所のみのお予定ではありますが、複数個所を視察し地域や環境ごとに支援項目に変更が必要かどうかは今後検討すべきポイントと感じました。

またCSAの作った学校では、ラオ語と英語はもちろんの事、日本語の授業も行いたいことや、今後の展望としてPCを導入しWEBを活用した授業を行いたいとの発言もあり、局長の自国の教育にかける想いを深く知ることができたと考えています。

短い意見交換ではありましたが、CSAの支援している学校から、教育水準や良い学習環境などがラオス中に広まっていくと非常に良い流れができると感じました。

ラオスは産業がなかなか発達せず、今年は観光に力を入れる年ということもあり、コロナで衰退してしまった観光業に注力していくとのことでした。CSAを通じた支援はもちろんのこと、ラオスに観光として訪れて、現地の人々と交流し、ラオスという国を全力で楽しむことが、巡り巡ってラオスの将来を担う子供達への支援、ひいてはラオスという国が豊かになるきっかけにもなりえる事であると感じた時間でした。

以上



2024年1月22日

11時00分～12時00分 在ラオス日本国大使館

報告者：佐橋 翔太、森本 貴幸

在ラオス日本国大使館にて、中野公使と古賀一等書記官と意見交換を行いました。

意見交換の中で大きな衝撃を受けたのは、“ラオス自身の自立”に関する話題でした。

ラオスはこれまで様々な国からの支援を受け発展してきた背景があり、支援・援助に依存している事が大きな課題とのことでした。自分たちで国を発展させる意識はあるものの、例えば不具合や修理が必要な事象が発生したときに、どうしても待ちの姿勢になる側面があるそうです。支援にも様々な方法があり、物資を届ける支援も当然必要ですが、今後自分たちでどう持続的に国を発展させていけるか、偉そうな言い方ですが考えさせていくための支援も同時に考えていかなければならないと思いました。

そのほか、ラオスへの訪問国に関する意見交換も行いました。ラオスと韓国では多い時で日に8本の直行便が結ばれているのに対し、日本からは現時点で直行便は一本もなく、往来も少ないとのことでした。実際に今回の行程中においても、韓国のツアーや団体は多くみられるものの、日本人は少なく感じました。日本ではまだまだラオスという国を知られていない背景には、物理的に航空網がつながっているかといった点や、ラオスの文化観光庁がどうアピールするかによっても差が出てくるように感じました。大使館としては、国としての宣伝は本来自国がやるべきという前提のもと、日本人がもっと気軽に訪問できるよう、ホテルへの支援や市内の案内看板の整備等、やりたいことは多々あるとのことでした。

大使館での意見交換を経て、今後の支援についてのあり方を大きく考えさせられるきっかけを頂けたと考えています。今回のワーキングスタディツアーにおいて、行程序盤に在ラオス日本国大使館を訪問し、ラオスの実情を聞いたことは、その後の視察での見方が変わるような、非常に意味のある意見交換であったと感じました。

以上



2024年1月22日

14時00分～15時30分 サイタニー地区 ホンガム小学校

報告者：松森 識裕、草次 祐治

首都ビエンチャンから車で約1時間のところに位置するホンガム村小学校を訪問しました。首都中心部から1時間も車を走らせれば周りにはビルもお店もなく、のどかな草原が広がり、道路も舗装されてない地区となりました。

小学校に到着すると、グラウンドに椅子をならべた沢山の小学生と先生が私たちを出迎えてくれました。また、村の村長や副村長までかけつけてくださいました。この小学校には11名の教員と231名の児童がいるそうです。1996年にC S Aが2番目に設立した小学校であり、その後、3回にわたって屋根などの修復をしているところです。

セレモニーでは、C S A杉山団長挨拶にはじまり、校長先生からのお話をいただき、C S Aから子供たちへサッカーボールとノートをプレゼントしました。C S Aメンバーが挨拶をする度に、とても元気のよい返事をしてくれていたことが印象に残っています。その後、子供たちとの交流では、日本の文化にも触れてもらいたいということで折り紙を使って、鶴や飛行機などを一緒に作りました。作り方を教えてほしい子供たちで、たちまち人だかりとなり、折り紙の練習をもっとしてこれば良かったと反省するC S Aメンバーでした。

また、グラウンドではプレゼントしたサッカーボールを使って、さっそく子供たちvs大人で試合をしました。

約20人vs 8人という数的不利な状況ではありましたが、スコアレスドローで30分間があったという間に終了しました。子供たちのエネルギーに圧倒されるC S Aメンバーでしたが、心地よい汗を流し、子供たちの笑顔に癒されるひと時となりました。ちなみにラオスで一番人気なスポーツはサッカーのようです。将来、有名選手がこの小学校から出ることを祈るC S Aメンバーでした。

以上



2024年1月24日

9時30分～12時00分 サンティパーブ高校生CSA寮

報告者：清水 孝則、松本 崇

私たちの到着を先生ならびに寮生が待ちわびていたように、サンティパーブ高校に到着し車を降車後、寮生より杉山団長へ花束贈呈セレモニーが行われ、団として言葉にできないぐらい絶大なる歓迎を受けた。

高校生寮ミーティングルームに場所を移し歓迎セレモニーが開催され、先ず初めに副校長先生より歓迎挨拶がなされた。ラオスは2024年観光年であることを伝えられ、高校生寮があるルアンパバーンは世界遺産の街でもあることも付言された。

サンティパーブ高校生寮はCSAからの支援のほか政府支援を受けながら取り組んでいるとのこと。現在寮生は90名のうち女性24名とのことで昨年よりも女性が増員している報告がなされた。特に感銘を受けたのが、CSAの支援を受けて寮生が勉学に励んだ結果、8人の寮生が4科目で県大会に選抜されたことへ非常に先生方は嬉しく誇りに思っているとのことであった。

続いて山崎事務局長より歓迎セレモニーへの御礼挨拶が述べられ、日本より12時間かけて到着した報告をおこなった。特に12月に物資を届けた報告をするとともに、今後も寮生が役に立つモノを届けていくことを伝え、必要なモノがあれば遠慮なく意見を出してほしいと付言された。5月に卒業生を祝う会で再訪するので、再会を楽しみにしていると伝えると寮生より盛大な拍手が沸き起こった。寮生へ日本から持参した「スポーツ用品」等の贈呈をおこなった。

次に寮生代表2名より「CSAによる寮を設立してくれたことへの感謝」「CSAは私たちの第二の両親と思っている」「ご支援を一生忘れない」「引き続き寮生として勉学で貢献していくことを約束する」と挨拶がなされた。

結びに参加された先生や寮生、村の長老とともにラオスの伝統である健康や繁栄を祈る儀式として「バーシーセレモニー」が開かれ、生徒一人ひとりより日本へ無事に帰国できるよう手首に糸を巻いてもらった。

セレモニー終了後は副校長先生をはじめ先生方と寄贈品や今後の支援内容等の意見交換がなされるとともに、実際に高校生寮で生活している各部屋や調理場等を案内いただき、サンティパーブ高校生CSA寮の視察が終了した。

以上



2024年1月24日

13時40分～15時00分 ルアンパバーン県教育・スポーツ省

報告者：清水 孝則、松本 崇



午前中のサンティパープ高校生寮を訪問後、ルアンパバーン県教育・スポーツ省の局長を訪問した。冒頭、団を代表して山崎事務局長より局長に対し御礼挨拶がなされた。現在進捗中であるUAゼンセン寄贈CSA26番目新校舎建設に際して、現地で村長さんに会うとともに街の人々から歓迎を受けている。工事は予定どおり2024年8月に終わり11月には引渡し式を予定している説明がなされた。特に学校建設にあたり、「建設した学校で子供達が将来を見据えて育っていくことを日本から応援している」是非明るい学校ができるよう県教育・ス

ポーツ省としてもバックアップをお願いし、5月にサンティパープ高校生寮の卒業生を祝う会で来訪する予定と報告した。その後に参加者各位が自己紹介をした。

次に局長よりCSAメンバーと会えることを光栄に思っていると歓迎の挨拶がなされた。ラオスの教育事情は、国家予算の18%が教育費、コロナ後は一部の学校で通常開校しているが、一部の学校では職員不足で未だに休校中の状況である説明がなされた。特にコロナ禍からインフラ財政局面で貨幣価値が極端に下がっており、教育に影響を及ぼしているとのこと。ラオスでは中学校までが義務教育、それ以降は家計負担で教育を受ける仕組みとのことだが、インフラの影響で学校に通わせられない家庭も一部であるとの事であった。

県教育・スポーツ省としては、早期に課題解決をすることが大切と感じているが、CSAの支援を受けてサンティパープ高校生寮で学ぶ生徒が非常に優秀であることもあり、助けてもらっていることに改めて感謝すると述べられた。

次にラオスの教育事情において家庭の事情で働かなければ学べない学生に対する意見交換をする時間が設けられ、日本では通信教育や夜間授業で学んでいる生徒がいる一例が伝えられた。



以上

2024年1月26日

11時00分～12時00分 在タイ日本国大使館

報告者：穂積 聡、久保 徹

在タイ日本国大使館を表敬訪問しました。宿泊先から車で20分走ると、日本国大使館の表札がある場所に到着、厳重なセキュリティーを抜け中に入ると、広々なスペースに建築された菊花紋章の付いた建物に案内された。入り口には鈴木二等書記官が待っており我々一行を快く迎え入れてくれました。

受け入れでは千葉一等書記官、鈴木二等書記官、青柳経済部専門調査委員が対応していただき、冒頭、杉山団長より表敬訪問の受け入れの御礼を伝えた後、鈴木二等書記官からも訪問していただいたことに対する御礼を頂きました。訪問側の自己紹介をし、山崎事務局長より今回のワーキング・スタディーツアーの日程概要やCSA活動実績の報告をしました。

その後、タイの政治経済の特徴や主要課題等の説明を千葉一等書記官より受けた。経済面ではコロナ後の観光業が急速に回復（2019年の7割程度）し、日本政府による開発援助や日系企業数が増加しているが中国の投資も増えてきている。また、中長期的な課題として下記5点が挙げられた。

- ①少子高齢化：出生率は日本より低い
- ②都市部と地方の経済格差
- ③貧困問題：バンコクの人口の10%がスラムで生活
- ④難民や移民問題：特にミャンマーからの移民が多い
- ⑤就業構造：全労働者の5割がインフォーマルワーカーと呼ばれる所得の低い労働者

書記官からの説明を受けて質疑応答を行ったあと、山崎事務局長よりCSAとして新たな支援を検討しており、引き続き情報交換をお願いしたいと伝え、在タイ日本国大使館の訪問を終了した。

以上



2024年1月26日

13時00分～14時30分 国際労働財団JILAFバンコク事務所

報告者：久保 徹、穂積 聡

在タイ日本国大使館訪問後、JILAFバンコク事務所を訪問した。

冒頭、杉山団長からCSAを代表し挨拶を行い、各自自己紹介が行われた。その後、JILAFバンコク事務所代表の関口氏より自己紹介とJILAFの活動紹介を頂いた。

JILAF自体は連合が作った労働分野の国際協力や国際連携、交流を促進するための公益財団法人として独立していて、政府やその他分野から支援をもらって運営している。

活動の中心としては現地支援事業や国際労使ネットワークを通じた草の根支援事業を主に行っているが、その中でもバンコク事務所ではSGRA（インフォーマルセクター労働者への草の根支援事業）をメインに活動を行い、7か所（タイ、ネパール、バングラデッシュ、ラオス、カンボジア、ベトナム、スリランカ）計10グループで活動を行っている。幅広い活動範囲だが、バンコク事務所は4人のメンバーで活動を行っている、その中でも職員のアネさんは、関口さんがNGOでボランティアをしていた時の、山岳民族アカ族出身で、当時40人いた子供の中の一人で、その子が日本の方の支援で学ぶ機会を頂いた感謝の気持ちもあり、自分で日本語を勉強し大学卒業後、日本の方に恩返しをしたい、国際協力の仕事にかかわりたいということで、20数年たって職員として働いていることもうかがった。

JILAFの活動紹介を受けたのち、質疑応答も貴重な意見交換ができました。

JILAFとCSAが今後も協力していくことを確認し訪問を終了した。

以上

